



協会ニュース

2021.3 vol.66

編集・発行 三重県医療ソーシャルワーカー協会
ホームページ <http://www.mie-msw.com/>
事務局 小山田記念温泉病院
〒512-1111 四日市市山田町5538-1
☎059(328)1260

目次

- ◇研修報告
- ◇病院紹介
- ◇協会トピックス①
- ◇協会トピックス②
- ◇次回研修案内
- ◇編集後記

三重県医療ソーシャルワーカー協会研修会《研修報告》

1. コロナ禍の面接技術 ますくしたの聴く技術

日時・場所:2021年1月23日(土) 10:00~ / Zoomを用いての研修

講師:国立病院機構三重病院 高村純子氏

参加者:27名

参加者の声:

- 普段面接時の自分の表情を確認する機会はなく、特にマスクでの対応がどうなっているかなど気にも留めていなかったのが、今日それらが確認でき、とても良い時間でした。さっそく教えていただいたことを意識して業務に臨もうと思います。ありがとうございました。
- 自分で思ってる以上に相手に表情や気持ちは伝わってないと感じたので、より伝わりやすいように表情作りや表現の仕方を工夫していきたいと思いました。
- 面接技術の基本の振り返りと、分かりやすいHow toに加え、グループワーク等通じ皆さんそれぞれのマスク下での面接技術の工夫も聞け、大変勉強になりました。



Zoom研修の様子

2. 実践報告会

日時・場所:2021年2月14日(日) 10:00~12:30 / Zoomを用いての研修

参加者:51名

前半 座長: 落合幸太郎氏(藤田医科大学七栗記念病院)

報告① 小坂絵里加氏 三重大学医学部附属病院

「心不全患者が地域で暮らすために一在宅診療の実際【津市・松阪市の場合】」

報告② 土屋貴弘氏 市立四日市病院

「患者と家族の意向が異なる場合の意思決定支援」

報告③ 加藤沙季氏 市立四日市病院

「限られた時間の中で患者の思いに寄り添うとは
~外国籍のがん末期患者への支援を通して~」

後半 座長: 落合伸也氏 松阪市民病院

報告④ 伊藤隆博氏 岩手県立大学

「MSWの業務負担感を組織内共有する効果」

報告⑤ 山本小百合氏 岡波総合病院

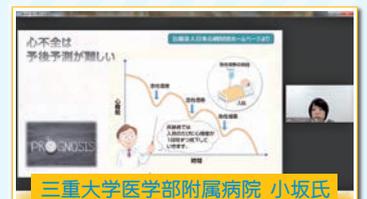
「コロナ禍で自分たちができること」

参加者の声:

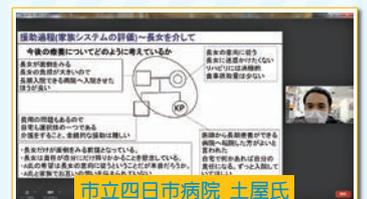
- 開催賜り誠に有難うございました。日頃、抱える身近な話題提供があるので、やはり三重県MSW協会の良さがより伝わります。引き続き、宜しくお願い申し上げます。
- 演題の全てに、それぞれに考えさせられることや学びがあり、良い刺激を受けました。コロナ禍ゆえの悩みや状況もありました。さまざまな状況下であっても、変わらず丁寧に仕事をしていくことが必要なのだと、みんなと一緒に共有できるよい機会となりました。ありがとうございました。
- 大学生も最後まで興味関心の湧く話題で大変有り難かったです。将来、医療ソーシャルワーカーを目指す身としてはとても貴重な機会であり、是非来年度も参加したいと強く思いました。有り難うございました。



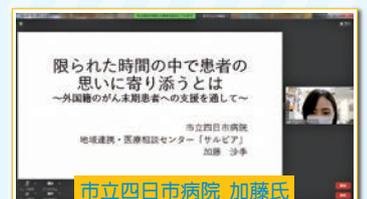
参加者の様子



三重大学医学部附属病院 小坂氏



市立四日市病院 土屋氏



市立四日市病院 加藤氏



岩手県立大学 伊藤氏



岡波総合病院 山本氏

病院紹介《尾鷲総合病院》

第9回目は、尾鷲総合病院からの報告です。

当院の医療圏である尾鷲市・紀北町・熊野市は三重県南部に位置しており、漁業と林業が盛んな海と山に囲まれた自然豊かな地域です。そのため、平地が少なく山を切り開いた斜面に住宅が密集しており、100段以上の階段を上った先に自宅がある地域もあります。

また、どの市町も産業が少なく、就労可能人口の少ない地域のため、高齢化率が40%を超えた超高齢化の地域のなかで、医療機関として住民の命と健康を守る役割を担っております。

尾鷲総合病院について

当院は昭和17年に尾鷲町立病院として設置され、その後、尾鷲市制とともに名称変更され、昭和44年現在の場所で尾鷲総合病院として開設いたしました。

尾鷲総合病院では基本理念の一つとして「地域の保健・医療・福祉との連携を推進し、地域の人々と共に創る病院」を掲げ、東紀州地区の中核病院として24時間365日二次救急の対応をし、地域住民にとって身近な医療機関として安心して受診できるよう取り組んでおります。

診療科は内科・循環器内科・外科・整形外科・産婦人科・泌尿器科・眼科・皮膚科が常勤医師対応しておりますが、小児科・脳神経内科・脳神経外科・耳鼻咽喉科・精神科(小児クリニック)が非常勤医師の外来として対応していただいております。病床数は現在一般病床199床、療養病床(地域包括ケア病棟)56床の計255床です。透析センターも設置しており150人のほど患者さんに利用いただいております。しかしながら、医師はじめ医療スタッフ数の減少があり、地域医療の担い手としての役割を果たすために日々努力している状況です。

地域連携室として

現在地域連携室ではMSW2名、看護師2名、事務員3名が業務に従事しております。主な業務として、MSWと看護師は主に相談業務を行っており、高齢者が多い地域のため、介護相談が主となることが多いです。また、転院の調整や在宅医療の相談なども多く、面会制限のなかでの退院調整は試行錯誤の連続です。

事務員は前方支援業務を中心として行っており、地域の開業医院からの診察・検査予約と管外医療機関への受診予約などの連絡調整もおこなっております。地域連携室一同、県内外の医療機関のみなさまにお世話になっております。今後ともよろしくをお願いします。

これからの病院として

平成31年4月より地域包括ケア病棟を開設しております。紀北地域には回復期病棟が無いと、地域の実情に合わせてリハビリに力を入れた取り組みを行っています。県内の専門医療機関での治療後のリハビリ転院にも取り組んでいます。また自宅での生活を応援しようと短期リハビリ入院や人工呼吸器使用中の方のレスパイト入院なども行っておりましたが、ここ1年半は新型コロナウイルス感染症の影響もあり対応に苦慮しております。

新型コロナウイルス感染症の影響により、地域の医療・保健・福祉の連携が改めて見直す状況になりました。新しい生活様式を取り入れつつ地域の皆様に寄り添ったMSWとして支援を行えるよう取り組んでいきます。

(文・尾鷲総合病院 地域連携室)



カンファレンス



レクリエーション



尾鷲総合病院

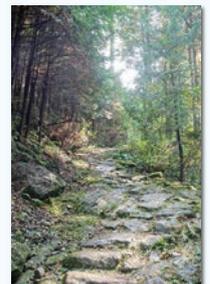
所在地：〒519-3693 三重県尾鷲市上野町5番25号
電話：0597-22-3111 FAX：0597-23-3285

近隣のおすすめ
観光紹介

熊野古道・伊勢路

熊野古道とは三重県・和歌山県・奈良県・大阪府の1府3県に跨がる、熊野三山といわれる3つの神社を結ぶ参詣の道です。尾鷲市、紀北町、熊野市を通る道は伊勢路といい、熊野三山と伊勢路を結ぶ道です。古くには「伊勢に七度、熊野に三度」という言葉が残っているほど、誰もが訪れたい憧れの地でした。世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部でもあり、日本の宗教・文化の発展と交流に大きな影響を及ぼしました。

江戸時代に敷かれた美しい石畳や、熊野灘を一望できる峠、日本一の棚田である丸山千枚田など多彩で素晴らしい景観が広がっています。多くの登山コースがあり、子どもから登山上級者まで楽しめます。



熊野古道

▶▶▶ 次回は、伊勢田中病院からの報告を予定しています。お楽しみに。



突然の知らせ

12月の始め、それは突然やってきました。月曜日のある朝、「陽性者が出ました。当分ははっきりしたことが分かるまで病棟へあがってきたらあかんよ。」ある医師からの内線連絡でした。頭が真っ白になりましたが、まずは目の前にある仕事に集中、それを終えてから、相談室に戻って正式な発表を待って、初日の記憶がそこからありません。陽性の患者やスタッフが出た当該病棟全てが自分の担当する病棟で、その日から起こった様々な事は想像を超え、たくさん試練になって私達の前に立ちました。

まずは院内感染が判明した時点で、病院の中は汚染エリア、中間エリア、清潔エリアにゾーニング(区分け)されました。そして清潔エリア以外の患者の退院調整を変更しないといけない作業が待っていました。家人や関係者に第一報を入れることはかなりの勇気がある事でした。電話口で怒鳴る方、不安で泣き崩れる方、厳しい口調ながらもエールをくれる方、本当に様々です。発生当初は院内でも共有されている情報が少なく、患者や家族に対して十分な説明が出来ないことが辛かったです。また自分も終息までに2回濃厚接触者としてPCR検査を受けましたが、結果が出るまでは生きた心地がしませんでした。

退院調整が中断すると、MSWのできる事がどんどん無くなっていきました。現場のスタッフがどんどん疲弊していくのに無力感に苛まれ、申し訳なくて落ち込みました。出来ることのないのなら感染リスクを減らす為、休むことも重要かもしれないと言い聞かせ、交代で休みをとることをしました。こんなに憂鬱な休みは経験したことがありません。

MSWとしての取り組み

最初は院内も情報が共有されず、対応にもとまどいました。それは私達だけでなく、いつも通り手術が終わっているのにリハビリができない、治療が終わっているのに退院させられないなど医師やコメディカルたちも同じでした。しかしながら、情報共有の方法が確立していく中でMSWが行うべきことにも気づかされ、実行に移せたこともありました。

時間が経つごとに患者家族の不安は募っていき、その感情が病院への不満になって私達に返ってくる事もありました。「うちの母がこのまま寝たきりや鬱になってしまったらどう責任とってくれるの！」入院中の面会が出来ない上に、クラスター対応により更に患者の様子が分からなくなり、不安だけが大きくなった家族に対して、患者の情報を家族に知らせる作業が必要だとその時気づきました。そこを私達MSWが担って、丁寧に一人ずつ家族に伝えていけば少しでも安心してもらえるのではないかと考えました。現場のスタッフは、限界の人数で対応を強いられ、そんなところまで手が回りません。すぐに感染対策チームに相談し、実施している対策や患者の様子、リハビリの進行状況、更には日常生活用品に不足はないかなど現場と情報共有し対応しました。

その時に大切にしたい事は丁寧な根拠に基づいた説明です。なぜ中間エリアの患者に退院制限がかかるのか、このままだといつ退院可能になるのかなどです。すると、最初は取り乱していた方も落ち着いて話を聞いてくれるようになり、どうしたらいいか一緒に考えてくれるようになりました。

勇気の源

しかしながら新型コロナウイルスはそんなに簡単ではありませんでした。期限やルールは所詮、人間が決めたもので、解除目前で何度も期限が延長になりました。潜伏期間を考慮し、2週間の移動制限になりますが、陽性患者が発生するたびに制限期間が延長になります。その都度変更を余儀なくされ、何度も対応に迫られました。それは私達スタッフの気力を大きく萎えさせました。しかしながらこういう時こそ本当のチームワークが試されるのです。普段から人間関係の良い職場だと自負がありますが、それがすぐに良い形で表れました。職域を超えて皆で、声を掛けあい、励まし合いながら、それぞれが出来る事を考え行動する事が出来ました。診療ができない療法士が現場に入って環境整備の手伝いをするなどコメディカルも皆が協力してそれぞれが出来る事を必死で考えて行動し、その光景こそスタッフひとりひとりの勇気になったように思います。

この期間中、患者家族とのやりとりから地域での偏見や噂の威力がどれほどのものか恐怖を感じずにはいられませんでした。その中でとても神経を使ったことのひとつは、陽性患者として治療を受けた方が地域へ帰る退院支援です。当然陽性で治療を受けた事など周囲に知られたくない訳がありません。そんな中でどこまで関係者に情報提供するべきか本当に迷いました。個々によって対応方法を考えるしかないのですが、ここは基本的に立ち回り、患者家族の思いを収集し、アセスメントしながら皆で対応を考えていきました。

今回私は該当病棟だけの対応でしたが、清潔エリアの担当MSWも退院支援に苦勞していました。院内では明確な区分けがされ、感染状況や指針は明らかですが、院外からみたら院内感染は建物ひとつの中で起こっている事で詳細までは分からないと言う事も念頭に於いて対応に当たる必要があると感じました。ここにも先に書いた丁寧な説明が必要だと強く感じ、皆で対応にあたりました。

介護サービス事業者との調整も本当に大変でした。国の規定では該当しないとされる患者に対してもPCR検査を受けて帰ってきてほしいと要望があったり、退院してからも一定期間はサービスを断られるケースもありました。根拠のない要望にしばしば疑問を感じつつも、心情的なことを考えると受け入れるしかありませんでした。そんな中でも前向きに協力していただいた関係者の方には感謝しかありません。

この経験を糧に

新型コロナウイルスは強敵です。今まで経験したことのない精神まで蝕んでいくような性格の悪いウイルスです。医療者として如何に心の健康を保つことの大切さを思い知りました。想定外のことがたくさん起こることをまずは想定し、冷静に行動することこそ重要だと思いました。どの医療機関でも起こりうることで、実際対応に追われている医療機関が多くあります。その日は突然やってきます。その時にはMSWだから出来る事、MSWでも出来る事、柔軟な考えと強さ、しなやかさで打ち勝って、この経験を自分のものにするしかないと思います。今回私はMSWとして本当に貴重な経験が出来たと思っています。そこで見て感じた景色をどうしても皆様と共有したくて今回寄稿させて頂きました。最後までお読み頂き、ありがとうございました。

協会トピックス ②

～コロナ禍の面接技術 VOL.2～

今回は、マスク下の無表情からの脱出についての話でした。正しくマスクをつけることで、相手に感染対策していることの安心感を与えたり、自身の顔のコンプレックス等を隠したり(!)とメリットもありますが、真顔では怖く見えてしまう、大きくジェスチャーしないと真意が伝わりにくいなどのデメリットもあります。相手に安心感を与える目元を意図的に作る、頬が上にあがり、目が三日月型になるよう、普段の3倍くらいを意識しましょう。

さて、今回は面接技術「うなずき」「あいづち」についてのお話です。積極的傾聴方法、最小限の励ましです。いわゆる聞き上手は、絶妙な「相づちの使い手」とも言えるでしょう。意図的な意味の使い分けとして①相談者が言語化しにくい内容を肯定し励ます、②関心があるのでもっと聞かせてほしいと促す、③共感等があります。黙ってうなずく、うんうんと大きくうなずく、目を見てうなずく、それでそれで?と波長を合わせるなど、相手に合わせて様々な使い分けが可能です。また、声の抑揚、強弱やタイミング、ほかの技法との組み合わせでさらに効果的に使うこともできます。個人的には、ネガティブな内容に共感するときは、「(心の中で)Oh~No~!」と横に首を振るのもよく使います。

私たちSWは、一方的に相談者を観察しているわけではなく、相手からもしっかり観察されていることを忘れてはいけません。「相談面接技術が未熟であれば、援助の入り口の段階でつまづくことになる¹⁾」と言われるように、言葉に出せない思い、時にはSOSを見逃さないよう、なぜSWが病院にいるのか、今こそしっかり自覚し、自身のスキルを振り返り、今の時代に合ったバージョンにアップデートしていきましょう。

(三重病院 高村純子)



引用 ¹⁾岩間伸之「逐語で学ぶ21の技法—対人援助のための相談技法」中央法規出版,p12,2008

今後の研修案内



<令和3年度総会>
5月22日(土)予定

<基幹研修Ⅰ 初任者向け研修>

4月27日(火) 18:00~19:30

『日本における医療ソーシャルワークの
成立と課題』

5月11日(火) 18:00~19:30

『医療ソーシャルワークの価値と倫理Ⅰ』

5月25日(火) 18:00~19:30

『医療ソーシャルワークと記録』

すべてZOOMでのオンライン研修になります。
詳細については協会から届くご案内を参照してください。
ご参加お待ちしております。ZOOMでの研修の受講方法が
分からない方はお気軽に協会事務局へお問い合わせ下さい。

編集 後記

コロナ禍において感染抑制、経済循環、ワクチン分配など様々な問題があります。

社会生活をバランス良く維持していくためには、個が持つ社会的な『倫理観』と新しく形成されつつある価値観で柔軟に考えることが重要だと考えます。それは対人援助技術を専門とする私たちMSWにも言えることです。コロナ以前からの普遍的なMSWの倫理観を大切しつつ、アフターコロナに向けた新しい世界を想像しながら、柔軟に対応できるよう、高い感度を持って思考、行動できるMSWになりたいと思います。大変な世の中ではありますが、2021年も皆で頑張っていきましょう。

担当:兵倉・小坂・松田